
宋代士大夫の著作とテキストの流伝

羅願と淳熙『新安志』『羅鄂州小集』『爾雅翼』

前村佳幸

はじめに

南宋の淳熙年間に成立した『新安志』は、清代を代表する史学理論家として知られる章学誠が「今の学者宋人の方志を論ずるに、また羅氏の『新安志』と范氏の『呉郡志』を推して称首と為すは、異辞無し」と述べ¹⁾、同じく考証学者の錢大昕も読後の所感を記すなど²⁾、宋代の地方志のなかでも注目されるものであった。このように、中国南方の一地方である徽州（現在の安徽省黄山区、江西省婺源县）のことを述べるに過ぎない本志が亡失することなく数百年の後まで伝世したのは、撰者として名を残す羅願（1136～1184年）の与り知らないことであった。

宋代以降、文字テキストの流布と継承において木版印刷が重要な要素をなすことは周知の通りであり、筆者も前稿において南宋の地方志が概ね刊行を前提に編纂されるものであったことを確認している³⁾。しかし、宋代の場合、成立当初から上梓されても、その原書がそのまま保全され普及することは稀であろう。何度かの版刻、場合によっては写本を経ての刊行を通してはじめて書物として存続したはずである。あるテキストが書物となって流布し継承されていく過程は一度限りのものではないのであって、テキストの受容を理解する方向としては、生成当時だけでなく歴代の版本をめぐる後代の流伝状況を把握することも欠かせない問題である。

ところで、ある地方志テキストを生み出した者が別の作品の作者ということもあり得るし、受け手のそれぞれの作品に対する関心や意義に差異と連関性があり、それがあつた特定人物の著書として、地方志テキストの受容や伝承に影響を及ぼしたことは十分考えられる。この見通しに大過なければ、同一作者の他の著作も視野に入れ、その受容や伝承過程を総体的に把握することにより、地方志テキストがいかに認識されて存続し或いは変容していったのか多面的な理解を得ることにつながるのではないだろうか。

そこで本稿では、淳熙『新安志』の撰者羅願の著作の宋元から明清に及ぶ受容・伝承について、刊行に関わった人々を軸に捉え、刊行の特色と書物としての展開にともなう外形上の変化を把握することを基本課題としたい。地方志は複数の編著者によるものが多いけれども、淳熙『新安志』は羅願一個人の意志と構想のもとで完成した性格が強いようである。また、羅願には淳熙『新安志』以外にも現存する著作がある。それには、『新安志』よりも後代の題跋が多くみられ、羅願のテキストの受容と伝承を理解する上で重要な史料となりうる。これらを検討することは、『新安志』のみに限定するよりも本志の性質を探る上で有効なのではないかと考える。もとより、テキストを理解する上で本質的なのは本文内容と成立背景を中心に検討することであろう。しかし、淳熙『新安志』の長期に及ぶ受容の過程は、本文の精読のみでは理解されにくい面があるように思われる。また、その生成の背景を読み解く上でも他の著作との関係は重要な視点となるはずである。それゆえ本稿においては、主として本文テキストの外部にある問題に取り組むことになる。

前稿では、原序に表現される理念などを通して、主として統治者と在地の知識人による宋代地方志の生成に関する一側面に注目した。本稿においては後代の題辭類を中心に検討を進め、全体として羅願という南宋の一知識人の生み出した各種テキストがいかに書物として世に現れ、作者との人的関係ひいては地域や時代も異なるさまざまな人々がいかにそれを受容し、伝承していったのか示し、その上で淳熙『新安志』存立の特色について論及していきたい。

I 羅願の著作と版本

羅願（字端良）は徽州歙県の出身で、その伝記としては、『宋史』巻380において、その父羅汝楫の伝に附記されているほか、元・曹涇の「鄂州太守存齋先生羅公伝」（1308年）がある。羅願は乾道2年（1166）の進士でありながら政権の中核と無縁な地方官と祠官を歴任し、湖北鄂州の長官在任中に40代で死去したけれども、その生涯に四つの書物ないしその素材となる詩文を遺している。成立順に示すと次の通りである。

- ①『古今長者録』
- ②『爾雅翼』32巻（1174年序）
- ③淳熙『新安志』10巻（1175年3月序）
- ④『羅鄂州小集』5巻

ここで明・程敏政編『新安文献志』（1497年）巻頭の「先賢事略」から宋代の徽州出身者における著作傾向をみると、文集以外の著書をもつものは少なく、あっても経学に関するものが多い。程大昌（1123～1195年）の『雍録』は地理書に属するけれども厳密には地方志ではない。②は、経書中のことばを解説・整理し儒学の基本テキスト十三経

の一部をなす『爾雅』から草・木・鳥・獸・虫・魚の篇目を選んで釈義を加えたものであるが、博物学的な関心が強く寄せられており、それは物産の項目をもつ『新安志』にも共通する面がある。宋代の著述家として羅願は十分特色ある存在といえよう。

①以外は全て四庫全書に収録されており、宋代の典籍として確固たる地位を占めている。そして①を除くすべてが宋代に刊行されたが、その版本は現存しない。②には点校本（安徽古籍叢書・黄山書社、1991年）があるけれども、元刊本などが参照されておらず定本としてはなお不十分である。①は序文が④に収録され「若干卷」と記されるのみで、習作としてはじめから刊行を意図せず手写による流布もなかったとみられる。④は没後友人の劉清之によって編纂・刊行された詩文集であり、「小集」という書名は遺稿の一部しか掲載できなかつたことに由来する。なお、これらの著作が実際に刊行されて社会に流布するのは、成立順とは限らないことに注意したい。③『新安志』における徽州趙不悔の序文は羅願の自序とともに原序をなしているが、歴代知州を記録する第9巻「牧守」が彼で終わっていることから、新任者が赴任するまでに刊行されたのであろう。そして、④は羅願の没年に鄂州の衙門で刊行されているのに対して、②『爾雅翼』は羅願の序文から実に百年近く経過した宋末の咸淳6年（1270）に初めて上梓されている。そのときの方回による跋文には次のようにある。

今『新安志』の世に行われること、馬班と等し。『小集』は僅かに文の十の一なり。劉公清之・子澄の刊む所なり。……『爾雅翼』は、序『小集』に見ゆるも世いまだ其の書を見ず。

これによると、③『新安志』は司馬遷の『史記』や班固の『漢書』のような存在であったといわれ羅願の著作で最も流布していたようであり、一方で②『爾雅翼』は④『小集』に収録される序文によってその存在が知られるのみであったことがわかる。方回は羅願と同郷（歙県）であったから、これは宋末の徽州における状況を述べたものとみてよいだろう。そして、③と④は宋朝内府の蔵書目録を基にした『宋史』芸文志、③は陳振孫『直齋書録解題』（南宋の私撰図書解題）にも著録され、『輿地紀勝』（1227年成立）や『方輿勝覽』（1239年序）といった徽州外の著者による地理書に引用されているのに、②が『直齋書録解題』（1249年ごろ成立）を転載した『文献通考』経籍志にも『宋史』芸文志にも見られないのは、徽州以外の地域でも同様な状況であったことを示唆している。なお『新安志』に関しては、後述するように一部の注の箇所には羅願の死以降の記載がみられるので、現行のテキストが原書のままのものか断定できない。筆者としては、テキストが書物として社会に現前するにあたっては、作者本人の関与しえない要素に大きく左右されたことを看過すべきではないと考える。

そこで以下、現代にいたる伝本過程と形態上の変化を把握するために明清時代以降の書目類と日中主要機関の蔵書目録や『現存宋人著述総録』（巴蜀書社、1995年）などを参照し、各版本について整理してみたい（なお、事情により実地での調査は行っていない

いことを予めお断りしたい)。管見によると、『爾雅翼』と『羅鄂州小集』については、それぞれ元・延祐7年(1320)王霽郡刻本(巻末洪焱祖音釈)8冊、明・洪武2年(1369)羅宣明刻本4冊(5巻附1巻)が陸心源・十万卷楼を経て岩崎氏の静嘉堂文庫に舶来しており、いずれも現存するなかで最古の版本とみられる。

さて、一般的に閲覧することのできる『羅鄂州小集』には二つの系統がある。四庫全書本(1781年)と粵雅堂叢書本(1853年刊、民国・百部叢書集成覆本、叢書集成初編採録)であり、ともに全6巻であるが、最後の第6巻はいずれも後代に追加されたものである。前者は『新安志』巻6～8の伝から一部をそのまま転載したものであり、明の万暦年間と推測される版本に由来し⁴⁾、後者は清・康熙年間の程哲・七略書堂本(1713年)において「汪王廟考実」「東觀漢記序」「新安志序」を転載したもので内容は全く異なる。明・天啓年間の羅朗刻本(1626年跋)は、七略書堂本の底本となったもので⁵⁾、清朝瞿氏の『鉄琴銅劍樓藏書目録』(1898年刊)巻21に著録されるほか、故藤田豊八氏の旧蔵本が東洋文庫に収蔵されている(2冊5巻附1巻)。

七略書堂本の巻頭には程哲の序、「諸家評論」「凡例」につづいて「原序」「原跋」として歴代の序跋文が掲載されており、これは原書にない付帯的なテキストを集成するものとなっている。羅朗の跋文の前には、明の弘治・羅惟善刻本(1500年)における祝允明(1460～1526年、伝『明史』巻286)の序文と惟善の叔父である文達による跋文が付されている⁶⁾。文達によれば、

吾が邑の師山先生子美もまた序を為りて之を板に刻むも、兵燹に燬るるに随う。国朝洪武初、七世孫山陽令伝道また名公に序文を求む。刊布を期欲せるもいまだ遂げずして卒す。茲にまた四世なり。家蔵僅かに録本有るのみ。文達、叔氏臻、兄祺卿、弟文昌・文輝、吳泰、孫麟、姪惟善等と与に、久しくして泯失するを懼る。咸な之を助くるを為し、また序して梓に録み以て其の伝を広げんとす。同邑王君宗植、聞きて之を喜び、宏齋曹先生の手鈔せる旧本を以て来示す。就ち其の遺失を附し其の訛誤を正すを為す。并せて鄂州の遺文数編以て集後に俾附す。

とあり、家蔵の写本と王宗植なる人物の所持している写本を基にしたという。王宗植は徽州の人で程敏政の『新安文献志』(1497年)にもテキストを提供しているが(程敏政序)、彼の所有する抄本は元・曹涇(宏齋曹先生)によるものといわれ、南宋の初版本と鄭玉(師山先生)による元刊本が失われている状況においては最も古いテキストを用いたことになる。ただし、ここでは羅宣名(伝道)による刊行が中途に終わったかのよう述べているけれども、静嘉堂文庫などに現物があるし、北京図書館に収蔵されるものは「北京図書館古籍珍本叢刊」(1988年)で常時閲覧できる。洪武本は一族でも記憶に止まるに過ぎないほど流布しなかつたのであろうか。羅惟善本が洪武本を利用していないならば、その流れを汲む羅朗本・七略書堂本と洪武本との間に別系統の版本としてどれほどの差異があるのか、本書の内容や構成を検討する際には注意する必要があるだろ

う。なお、明の万暦年間には、畢懋康による万暦45年（1617）の版本があり、四庫全書本の系統と関連するものと考えられる⁷⁾。

『爾雅翼』については、筆者の確認した範囲では、明・正徳14年（1519）の羅文殊刻本が元刊本に次いで古く、『鉄琴銅劍樓藏書目録』巻7によると、都穆（1459～1525年）序、羅裳の記と方回の跋を付すという⁸⁾。この版本には正徳己卯（1519年）の顧璘（1476～1545年）跋もついているはずである。さらに明代では、嘉靖年間（1522～1566）の畢効欽校刊「五雅本」⁹⁾、万暦年間の刻本がある。国会図書館の目録には胡文煥による批校の加えられた万暦23年（1595）序の刊本がみえるが、静嘉堂文庫の目録にも胡文煥校の万暦刊本が著録されている。そして北京図書館には、元・洪焱祖音釈をもつ万暦33年（1605）羅文瑞刻本があり¹⁰⁾、東洋文化研究所にある元・洪焱祖音釈、万暦33年跋刊と同じ版本とみられる。これらの万暦年間の版本の関係を確定するためには現物を対照するべきである。さらに、姚大受校補の『重校爾雅翼』が北京図書館に収蔵されている。そして、崇禎6年（1633）重修本（天啓6年：1626年序刻）は¹¹⁾、『羅鄂州小集』を刊行した羅朗手がけたものを同姓同郷の羅价が校正・出版したものとみられ¹²⁾、その原板と推測される天啓刻本は北京図書館にある。清代になると、本書は四庫全書に採録されるとともに、民間による『学津討原』にも収録されており（刊行は1805年、民国・百部叢書集成、叢書集成初編に採録）、叢書に入ることで閲覧者の利便は着実に広がっていたことが窺える。

閲覧者に関しては、正徳刻本について序跋文を執筆した都穆（弘治12年進士）と顧璘（弘治9年進士、伝『明史』巻286）の郷里は蘇州呉県、南京上元県であったし、胡文煥（室号文会堂）は杭州銭塘県の人で『格致叢書』の刊行で知られ¹³⁾、明代から本書が文芸学術の盛んな江南でも注目されるようになっていたことが窺える。

予向に宋の『羅鄂州集』を嘗読し、朱子其の文に敬服するを見るに、以為らく南渡以来文人の有ること鮮き所なりと。近ごろまた鄂州の著わす所の『爾雅翼』を其の遠孫惟美より得たれば、則ちまた以て鄂州の学博く、而うして人の窺い易き所に非ざるを見るなり（『爾雅翼』顧璘跋）。

この文によると¹⁴⁾、顧璘は先ず『羅鄂州小集』によって『爾雅翼』の存在を知ったといい、南宋の方回と同じ経緯であるが、手にしていたのは羅惟善らによって刊行された弘治本なのだろう。ここでは、彼に『爾雅翼』を贈呈した惟美が惟善と同じ排行字（惟）で同族同世代とみられることも注目される。このように、江南の一流文人が本書を高く評価していたことがわかるけれども、刊行者については、羅文殊が「羅願十六世孫」、羅文瑞が「羅願裔孫」、羅朗が「羅願從裔孫」というほか身分・経歴は判然としない（「七世孫山陽令」の羅宣明については次章で扱う）。また畢効欽、畢懋康（万暦26年進士、伝『明史』巻242）と程哲は歙県人であった¹⁵⁾。以上の点から、明清時代において『羅鄂州小集』と『爾雅翼』は、主として羅願の後裔と称する同姓の者と徽州出身の人物により

刊行され流布したことが指摘される。

なお、『爾雅翼』には元代に洪焱祖による音注が施されており、それを各巻末に附刻するかたちで刊行されていた。ただし明代最古とみられる正徳本とそれに次ぐ五雅本に関しては目録からでは確認できず、前者に関しては宋代のテキストに基づき附刻されていない可能性もある¹⁶⁾。その場合、元刊本系統の版本はさらに後の万暦年間の羅文瑞刻本以降ということも考え得る。確かに、洪焱祖の音注は清初の『千頃堂書目』に「爾雅翼音釈、三十二卷」(巻3小学類・元)とあるように、独立したテキストと見なされることもあったようである。他方、清代においては四庫全書と『学津討原』に加えて、洪汝奎という人が同姓の洪氏とそれに関係する著作を集成した『洪氏晦木齋叢書』においても『爾雅翼』全体が収録されている¹⁷⁾。これらのことは、読者にとって音釈テキストが本文と不可分の存在となっていたことを如実に示しているだろう。こうして、程度や形式の違いはあれ、『爾雅翼』もまた『羅鄂州小集』と同じく宋代のオリジナルとは異なる形態で固定化するようになっていったのである。

そして、淳熙『新安志』は、明清時代においては『羅鄂州小集』と『爾雅翼』よりも目立たない存在となっていたようである。清前期の人、黄以祚の跋文(1707年)には次のようにある。

『新安志』十卷、郷先生・羅端良先生の著わす所なり。先生、生朱子と時を同じうす。〔朱子〕しばしば其の文字縝密にして経緯有るを称え、また西漢の人の風有りと謂う。而れども世の伝う所は『鄂州小集』暨び『爾雅翼』に止む。『新安志』に至りては、目僅かに『文献通考』経籍中に見え、伝う者有ること罕なり。新城・王阮亭先生(王士禛)かつて之を求むるも三十年して得るべからず。書を汪君于鼎(汪洪度)・文治(洋度)に致して謂く、誠に覓寄するを得たり、まさに共に之を表章すべし、庶幾わくは広陵より散じ、人間に絶えざらしめんことを、また快事有らんことを希う云々、と。

王士禛(1634～1711年)は、山東新城県の出身、順治15年の進士で刑部尚書に栄達した官僚であると同時に詩の大家であり多数の著作により清初の故事を詳しく伝えた文人学者である¹⁸⁾。彼は『新安志』の存在は知っていたものの現物を見ることができず、康熙36年(1697)の10月頃、徽州の門人汪洪度の贈呈によってはじめて入手しており¹⁹⁾、その刊行を支持していたことがわかる²⁰⁾。ここでは、広陵(揚州)から流布していくことが期待されている。これは同じく跋文(書後)を記している呉瞻泰が清代における一大出版地であった江都県(揚州)に寓居し刻書を行っていたからとみられるが²¹⁾、彼の本籍は徽州府歙県であった。

呉瞻泰によれば「蔵書の家まま抄本有ると雖ども、多く購う可からず」という状況が続いていたというが、これは前稿でも触れたように、編纂物である地方志は後代の人によって更新されていくものであり²²⁾、それにより先行するものの存在意義が低下し散逸

していく傾向があったことと関連するようと思われる。徽州の場合、明初の洪武10年(1377)に朱同を中心に『重編新安志』が編纂されている。これは、淳熙『新安志』と後続する宋元時代の『新安統志』(1235年)、『新安後統志』(1319年)を抱き合わせ、さらに後の出来事を追記して一部の図書にしたものであり²³⁾、明の一大類書である『永樂大典』が淳熙年間以降のことについて引用している『新安志』はこの重編の方を指していると考えられる²⁴⁾。また、『千頃堂書目』には「朱同重編『新安志』十卷 洪武間修 明初礼部侍郎(巻6地理類上)と著録されている。このように、明代においては淳熙『新安志』は重編『新安志』の一部分に組み込まれてしまい、単独での存在意義が低下していたと考えられるのである。

さらに、弘治年間以降から清代にかけて徽州府志と題して編纂され流布していくほか、県志も刊行されるようになった。それらは概ね宋代の事柄についても記載している。これにより、淳熙『新安志』を直接参照しなくても後の地方志によりある程度は宋代のことも知ることができるので、後代の読者にとっては淳熙『新安志』の利用価値はあまり高くなかったのではないだろうか。実際、淳熙『新安志』を除き弘治『徽州府志』以前の地方志全てが散逸している。

こうした状況を反映してか、『新安志』の現存版本で最も古いものは、既に紹介している康熙46年(1707)の黄以祚・承德堂刻本(内閣文庫蔵)であり²⁵⁾、これは光緒14年(1888)に徽州黟県出身の李宗焯により覆刊されている(大化書局・宋元地方志叢書所収)。この版において、「慨然として故国の典型・前賢の述作を念じ、其の零落し完からざるを聴くに忍びず」(呉瞻泰・書後)、テキストの蒐集、校訂、版刻を進めたのは、黄以祚(字若周)、汪洪度(字于鼎)・洋度(字文治)兄弟と呉瞻泰であり、呉瞻泰の父苑も強い関心をもっていただことがわかる²⁶⁾。また、本版には見えないが王士禎に序文を依頼したという。そして、目録と各巻末尾巻目下(巻1を除く)にある刻字「族裔孫鳳翥校字」は、羅氏が関与していたことを示している。ところで、先に取り上げた七略書堂の程哲も王士禎の門人で師の著作を出版しており²⁷⁾、その『羅鄂州小集』6巻本でも王士禎の評語を載せている(書家評論)。さらに注目すべきは、『羅鄂州小集』の刊行において呉瞻泰らが資金を供出し、テキストの収集と校訂に汪洋度が協力していたことである(凡例)。なお、後に承德堂の版木は「傅溪程氏」の所有となり秘蔵されたという²⁸⁾。また、七略書堂本は巻頭に題辞類を連ねる点では原書の形態を損なうものといえるが、程哲は従来『羅鄂州小集』にあった「鸚鵡洲賦」を兄頌の作品として附録の「羅鄂州遺文」に移しており、校訂に十分気を遣っていたことが垣間見える。このように、羅願の著作を相互に刊行し密接なつながりをもつ士人文人層の存在によって、淳熙『新安志』の印本が復活したのである。

上記の他には、四庫全書本と嘉慶17年(1812)刻本(中華書局・宋元方志叢刊所収)があるのみである。嘉慶本では乾道5年(1169)9月朔の日付のある「汪王廟考実」と

羅願の伝記である曹涇撰「鄂州太守存齋先生羅公伝」（1308年）が附録とされており、康熙本と四庫全書で巻1の祠廟の部分に「汪王廟考実」が附刻されているのとは異なる。この二つのテキストは『羅鄂州小集』にも用いられており、ここでも後代の人々の意図によって体裁上の変化が生じていることがわかる。嘉慶本は、清中期の考証学者丁杰（号小疋、1807年没）を中心に刊行されたようであり²⁹⁾、その門人の方輔（徽州歙県出身）が現在静嘉堂文庫に収蔵される『新安志』抄本に付した手跋文をみると、丁杰により黄氏の版から手写されたものが底本とされた経緯を推測することができる³⁰⁾。

上述の通り、『新安志』は18世紀以降の版本しか残っていないし、現存する抄本もそれに準ずるとみられるため³¹⁾、現行の『新安志』が編纂当時のものと全く同一とすることには特に慎重でなければならないが、現存する版本の巻数は羅願と趙不悔の原序や『直齋書録解題』及び『宋史』芸文志が記しているのと同じ10巻である。なお、『新安志』には注記されている部分があるが、なかには明らかに羅願以降の者に追加されたものがある。例えば、科挙の合格者に関する巻8「進士題名」に羅願の名があるが、そこには、

歙。朝奉郎・知鄂州。姪似臣、姪孫南仲

という注記がある（乾道二年蕭国梁榜割注）。これにより、歙県籍の羅願が1166年に進士に及第し鄂州の知事を務め、羅似臣という人物の叔父にあたることがわかる。しかし、羅願が鄂州に着任したのは淳熙10年（1183）春であり、彼による『新安志』の序文は同2年（1175）3月、知鄂州在任中に急死したのは同11年（1184）7月のことであったから、この注は羅願の死後に施されたのである。ただ、この程度なら同じ版木に増刻することでも可能である。そして、こうした注記はあまりなく羅願によるものがほとんどであるとみられる。従って、筆者は『新安志』の構成と内容は南宋時代における原初の刊本と基本的に変わっていないと仮定している。つまり形式上、『新安志』には『羅鄂州小集』や『爾雅翼』のような異本は生じておらず、本文テキストと書物としての一体性や同一性が保たれた可能性は高いように思われる。

以上、本章では羅願の著作に関して明清時代を中心とする版刻状況について検討した。その結果、『新安志』を含む羅願の著作の伝承、そして書物としての形態確立において、羅願の後裔と称する同姓と地元の人士が決定的な役割を果たしていたことが明らかとなった。羅願の著作は、先祖ないし郷土の先人の生み出した優れた図書として尊重され、他の地域の文人碩学にも勧められることもあった。とはいえ、テキストの成立当初からすぐに全国的な典籍となったわけではなく、たとえ刊行されても常に散逸の危機にさらされる中、明清時代の人々による断続的な刊行と清代以降盛行するようになった叢書類への採録の結果実現したのである。それでは、原書や初版本の存在していた宋元時代においてはどのような状況だったのだろうか。以下の章においては、羅願自身とその前後の世代を中心に徽州における羅氏がどのような存在であったか探るとともに、当時の徽州社会における羅願のテキストの受容、伝承、刊行の様態について検討していくことになる。

II 宋元時代の徽州羅氏

因縁めいた逸話もあるけれども³²⁾、羅願の生涯は自ら望んで地方官と祠官ばかりに就いて出世よりも読書と学究を優先させ、『新安志』など地元に着した内容のテキストも執筆するといった穏やかなものである。科挙に合格しながら、中央官界での栄達よりは地域社会に深く関与することを志向する姿勢が南宋時期の士大夫層において顕著となることはつとに知られている。羅願についても、かかる「ローカルエリート」としての性格を十分に示しているだろう。それでは、羅願及びその一族は羅願が地方志を編纂した徽州においてどのような存在であったのだろうか。本章では、宋元時期における羅氏の展開について整理し、ひいては羅願の著作の伝承にどのような役割を果たしたのか検討していきたい。

洪适撰「羅尚書墓誌銘」（『盤洲文集』巻77）によれば、徽州羅氏が戦乱を避けて豫章（江西南昌）から東方徽州の倚郭県である歙県に到来したのは五代の頃だという。それからおよそ二百年近く経った北宋末期の政和2年（1112）、羅願の父汝楫（1089～1158年）が進士となったことは、徽州羅氏にとって一大契機となった。汝楫最後の妻である俞氏（魯国夫人）が輿入れした時分の様子として「新安公、筆耕して家を起し、儉朴を尚び、門中に華靡の飾無し。淑人来るに冠族よりし之に処るも晏如たり」（洪适撰「俞淑人墓誌銘」、『盤洲文集』巻77）という表現がある。俞氏の曾祖父汝尚は慶暦2年（1042）の進士で『宋史』巻458にも立伝されており、それ以降の世代も官僚を続けて出す名家であって浙江湖州を本籍としていた。ここで、夫人の美德を示すために異郷の質素な婚家になじんだことが述べられたのであるが、これにより、それまで羅氏が「冠族」と認識されるような官僚士大夫の家柄ではなかったことを知ることができる。また、汝楫の曾祖父まで子の功績によって官位が追贈されていることから、北宋の大部分の期間、羅氏は子弟に教育を施す意識と余力はあるものの、国家から資産に応じて徭役を課せられる一般民戸に属する中小地主であったと考えられる。

さて、羅汝楫と妻俞氏は同じ年に死去し（1158年）、合葬され洪适（1117～1184年）による墓誌銘が贈られたのであるが、淳熙『新安志』巻9 牧守によると彼は汝楫らの没年の翌年に徽州の知事として赴任しており（1159年9月16日～1161年2月29日）、既に任官していたものの服喪のため郷居中の息子達に依頼され（羅願23歳）、「郡を去るの明年、乃ち克く之が銘を為る」とあるので離任の翌年にできたものである。後に羅願は『新安志』の編纂・刊行においても知州趙不悔の協賛と支援を得ている。知州といえば当地における最高位の統治官であり、洪适はその父と兄弟とともに進士出身で文名を知られた人物であるけれども（『宋史』巻373）、同じく士大夫で高官を務めた父をもつ羅願達にとっては個人的な問題を相談しその力添えを期待できる存在と見なしていたことがわかる。

汝楫の息子は6人おり、その名は汝楫の伝記史料である洪适撰「羅尚書墓誌銘」、淳熙『新安志』巻7伝「先君尚書」、『宋史』巻380列伝の三種に共通している。すべて有官者の子弟を対象とする恩蔭により仕官しており、進士出身は羅願（乾道2年：1166）だけであった。ただし羅願もまた紹興25年（1155）以来現任官の身分を有し、その資格により解試を免除される鎖厅試を通じての合格であった³³⁾。五男の羅願は汝楫47歳の時の子供で、兄頌（1191年没）、末弟頤とともに俞氏が生母で上の3人とは異母兄弟であったとみられる³⁴⁾。「羅尚書墓誌銘」によると娘2人は胡姓、俞姓に嫁しているが、夫はいずれも実際の職務（差遣）を有しており、前者は徽州婺源県出身で国子司業の時に若き汝楫の才能を称賛していたという胡伸（『新安志』に伝あり）、後者は母俞氏の縁者なのかもしれない。羅願の弟頤の妻汪氏の父若容（1107～1161年）、汪氏の母方の祖父胡舜陟（1083～1143年）は『新安志』に伝が立てられている³⁵⁾。なお、「鄂州太守存齋先生羅公伝」にみえる羅願の妻呉氏の詳細を知ることはできないけれども、その出自もまた士大夫の家系であった可能性はかなり高いと思われる。

呉氏といえば、頤の息子と孫たちも地方官に就いたことが確認されるが³⁶⁾、頤の娘婿呉炯の父徹（1125～1183年）は紹興27年（1157）の進士であり³⁷⁾、「眉山三蘇、江東二呉」（『新安文獻志』先賢事略上）と称された文人であって、本貫は徽州休寧県であった。彼の文集『竹洲集』には南昌・羅任臣の跋文（1234年）をもつ版本がある³⁸⁾。羅任臣は羅願の甥（猶子）と同名であり、その跋文によると幼少のころから親しんでいたという³⁹⁾。その反面、羅氏の家では汝楫の遺稿を保管していたにもかかわらず⁴⁰⁾、それを呉徹の一族のように子孫の事業としてまとめ朝廷へ献上したり、刊行の上で贈呈したりしていないようである。これは、汝楫が吏部尚書に選任され金国に奉使するなど要職を務め、龍凶閣学士・知嚴州を最後に官僚として実質上引退し、服喪期間中に死去した際には右通義大夫（『建炎以来繫年要録』巻179、紹興28年6月癸丑条）、最終的には開府儀同三司という文臣における最高位を追贈されるなど（『宋史』巻380）、呉徹（文肅）のように子孫が著書を献上することによって追諡してもらう必要がなかったことも関係しているのかもしれない。

なお、羅願の次の世代で進士（1193年）に及第したのは兄甥の羅似臣である。彼の詳しい官歴などについては同時代史料ではわからないが州学教授で退任したと伝えられるから⁴¹⁾、羅願のように読書や学問を優先する性格であった。以上みてきたように、羅願の一族は、科挙と婚姻によって士大夫としての社会的地位を名実ともに確立し、羅願自身もまた進士の身分を獲得し、兄弟とその子孫もそれなりに仕官して官僚の家（官戸）としての法制度上の地位特権を享受し続けたのである。

元代になると、徽州羅氏はもはや正史類に取り上げられることはなく、学問文芸での事績にも見るべきものはない。一つ注目されるのは、曹涇が羅願の伝記「鄂州太守存齋先生羅公伝」をまとめたのが至大戊申の歳（至大元年：1308）であり、その資料として

これは具体的職務をとまなわない散官に過ぎず実際に遠方の地方（容州は広南西路）に赴任するようなものではなく⁴³⁾、羅洪が父祖の恩蔭や進納などによってかろうじて官僚身分を得ていたことが窺える。また、「従孫」羅裳が転写・保管していた副本をもとに『爾雅翼』の初版ができたことが方回（1227～1307年）の跋文に記されている⁴⁴⁾。これについては清・陸心源の『皕宋楼蔵書志』に、羅裳の「記」が掲載されており⁴⁵⁾、「曾姪孫」と記されているので裳が洪と同世輩であることが判明し、さらに紀年は判読不可とされているものの淳祐の年号（1241～1252年）が確認できる。ちなみに『爾雅翼』が知徽州王応麟によって刊行されたのは、方回43歳の咸淳6年（1270）のことである⁴⁶⁾。方回（字万里）は羅氏と同郷（歙県）で景定3年（1262）の進士である。宋末元初の徽州を代表する学識者というべき方回・曹涇（次章で詳しく触れる）、そして羅願から三代下る羅洪・羅裳は彼らよりやや上の世代であったと推測されるだろう。こうして、科挙での成功者こそ輩出していないものの、テキストの転写や学識者への提供、南宋以来、徽州随一の民間教育機関である紫陽書院の指導者に就任するような人物を娘婿にしていたこと等を踏まえれば⁴⁷⁾、元代前半においても徽州羅氏全体でみれば読書人、地域の名士としての資質をそれなりに保持していたことは確実と考える。

さらに下ると、元末明初の名儒宋濂による「徽州羅府君墓誌銘」（『宋学士文集』巻44、芝園前集巻4）があり、羅旦（1294～1356年）という人物を汝楫の子孫としている⁴⁸⁾。羅旦（字希明）は、息子を遺さず早世した兄を幼少の頃に承継し⁴⁹⁾、兄嫁を母、継母を祖母として孝道にのっとりて仕え⁵⁰⁾、やがて次のように、

鬪争解けず、將に有司に赴愬せんとす。籩豆酒漿を具え、呼びて之を平らぐ。社祠壊れ、民祭禳するに地無く、俚俚として諸野に号するや、屋を為りて之を像る。環秀橋敗れ⁵¹⁾、往来する者危く、顧視し敢て度らず。衆に倡えて巨木を市い之を構ゆ。春和らぎ木気萌ゆるや、農父山に入りて新条を刈り以て田に畜う。刈る者家単にして往往食さずして作し、道上に困頓す。傭人を役い淖糜を昇え之に食わしむ。府君の好施ただ此のみならず。四方の宦游、歙に過る者有らばみな館を府君に仮り、久しくして彌（いよいよ）恭しく、頻行するもまた驢る所有り。士大夫、言府君に及ばば必ず辞を同じうし之を称し、惠人惠人と曰うと云う。

住民間の諍いを調停したり祠廟や橋梁を修築したり、さらに徽州を訪れた士大夫をもてなすなどして名望を集めていた。そして至正11年（1351）に湖北蕪州で蜂起した紅巾軍（徐寿輝の天完国）の一派が侵攻してきた際には⁵²⁾、元朝の側につき自衛団を組織して抵抗し⁵³⁾、至正16年春、避難先で叛徒に拘束されても屈服せず壮絶な最後を遂げたという⁵⁴⁾。その父綺は一応官位（承節郎）を有してはいたようではあるが、無位無冠（一韋布之士）に過ぎない羅旦の行状の特色とは、自らの基盤を家族同族と鄉村社会におき、そこで倫理的な日常生活を送り社会的な活動にも自発的かつ熱心に取り組むというものであった。科挙制度がエリートを生み出す機能をおよそ停止し、さらに南人が最下層と

されたモンゴル統治下において顕彰に値する人物類型とは、火急の際に武装し地主支配の体制を守った一面にとどまらず⁵⁵⁾、儒学的教養に依拠しつつ社会秩序の基盤として同族と地域を重視し、その実践により平時から内外に影響力を及ぼすというものであって、羅旦もまさにそのような人物として叙述され伝承されようとしたことがわかる。

羅宣明（字伝道）は羅旦の命により自衛団の指揮を執っていた息子の一人で明朝に仕官し県知事（江西靖安県、江蘇山陽県）を務めた人物である⁵⁶⁾。彼は『羅鄂州小集』を重刻しようとして、次に示すように、ちょうど元末から太祖即位の洪武年間にかけて、宋濂をはじめとする士人に序跋文を寄稿してもらっており、その際に始遷祖から17代に及ぶ「家譜」を見せて羅願が自身の「七世祖」にあたと述べたという⁵⁷⁾。宣明による『羅鄂州小集』の刊行が自分の家系が羅願に連なるという主張と連動していることは明白である。

『陌宋樓藏書志』巻84には、明洪武刊本・汪啓淑（1722～1799年）旧蔵の『羅鄂州小集』が著録されており（現在は静嘉堂文庫所蔵）、元・鄭玉の序文が全文掲載されているほか次の序跋文が附刻されていることを記す。宋濂序（洪武二年）、宋濂記、趙壩序、李宗頤序、蘇伯衡序（洪武二年）、林公慶序、趙汭序、趙汭跋、王禕序、馬瑊序（洪武己酉）。なお巻数を6巻附録2巻としているが、これは四庫全書と同じである。北京図書館古籍珍本叢刊の「明洪武2年羅宣明刻本」で確認すると、やはり全5巻で附録も分巻しておらず静嘉堂文庫の目録と合致する。その配列は次の通りである。

題辭

- 宋濂序（洪武二年春壬二月：1369年2月）→「其諸孫宣明」⁵⁸⁾
- 宋濂記（紀年なし）→「鄂州賢子孫宣明」⁵⁹⁾
- 趙壩序（乙巳夏六月：1365年）→「鄂州七世諸孫伝道」
- 李宗頤序（乙巳歲十二月：至正25年、1365）→「鄂州先生則其七世祖」
- 蘇伯衡序（洪武二年十二月：1369年）→「今年會公七世孫宣明於京師」
- 林公慶序（紀年なし）→「先生之七世孫伝道」
- 馬瑊序（洪武己酉仲春：1369年2月）→「其孫山陽令伝道」
- 鄭玉序（紀年なし）⁶⁰⁾

後序

- 趙汭序（甲午歲十一月：至正14年、1354）⁶¹⁾
- 趙汭跋（旧題後十有一年八月：至正25年、1365）⁶²⁾→「羅君伝道鄂州使君七世諸孫」
- 王禕序（洪武二年春三月：1369年）→「其七世孫宣明」⁶³⁾

これらの文章は、程哲修刻の康熙・七略書堂本（1713年）を底本とした粵雅堂叢書本の冒頭における「羅鄂州小集原序」に全て掲載されている（配列は異なる）。それらを参照すると矢印で示したように、前人の鄭玉を別としてすべて宣明と羅願の系譜関係についてふれていることがわかる。なお、洪武2年は『元史』の編纂が行われた年であり、

宋濂（1310～1381年、伝『明史』巻128）と王禕（1322～1373年、伝同巻289忠義）はその総裁官に任じられ、纂修官として趙沄（1319～1369年、伝『明史』巻282儒林）と趙燠（伝同巻285文苑）も抜擢、参加している。また、李宗頤（後に叔正と改名、伝『明史』巻137）と蘇伯衡（伝同巻285文苑）も学官として太祖から高い評価を受けていた。彼らのような当時一流の学識を有し明朝に重用された人々が宣明の主張を受け入れ、その喧伝に一役買っているわけである。先に紹介した羅旦の墓誌銘も宣明の依頼に応じた宋濂が執筆したものであった。かかるテキストは執筆者の文集を通して人の眼に触れるし、刊本は追加の題辞により新たな特色や権威を帯びようになる。このように、官僚・地主層に属する人物が新たな時代を迎えるにあたって、前代前々代に誇るべき先祖をもっていたことを裏付ける“現物”としてテキスト（墓誌銘）と書物（刊本）を位置づけていたのである。そして、その人脈を利用してそれを推進することは、ときには自分自身の著述を遺すことよりも重要であり、効用があったのだろう。

ただし、羅旦の墓誌銘では宣明の祖父綺までの名前しか記されていないし、同じく宣明の依頼による宋濂撰「題宋高宗賜答羅尚書手詔」でも宣明が汝楫の子孫であると述べるにとどまる⁶⁴。そのため刊行された文献では、宣明らが本当に羅願直系の子孫なのかどうか確認できない点注意を要するが、宣明の主張がさほど抵抗なく受け入れられていたことも重要なのではないだろうか。そこで「家譜」に注目すると、徽州は明清時代に修譜（族譜の編纂）の活発であった地域として知られ、元から明にかけては、その全域を対象として名門の家系を簡潔にまとめ序列化した〈名族志〉が編纂・刊行されている。そのうち日本に現存する『新安大族志』（東洋文庫蔵）に関する多賀秋五郎氏の整理によると⁶⁵、徽州羅氏は各県に散在している他の多くの氏族と異なり歙県のみを居住地としている。また手元の族譜関係目録を検索すると⁶⁶、徽州において充実した族譜をもつ羅氏が歙県に展開したことが窺われる。これらについては、移住以来、羅氏の宗族全体が強固に定着し、また歙県内での結合を重視していた結果である可能性を考えることもできようが、徽州羅氏といえばそれだけ羅願とのつながりを確信、主張しやすかったのではないだろうか。

以上により宣明の活動から、少なくとも、南宋から元代そして明初にかけて、官僚としては栄達したものの著作の伝わっていない汝楫よりは、書物のかたちをもって存在している『新安志』『爾雅翼』及び『羅鄂州小集』の作者である羅願が徽州羅氏の最も代表的な人物となり⁶⁷、その家系のルーツとなるべき存在として後代の羅氏に強く意識されるようになったことを指摘できるだろう。そしてこの意識は、先に三つの図書の伝本過程において確認したように、その後の徽州羅氏にも受け継がれていくのである。それでは最後に、羅氏以外の人々がどのような意図や姿勢をもって羅願のテキストに接したのか検討したい。

III 宋元時代の士大夫と羅願のテキスト伝承

羅願の著作は、彼が生前独自に刊行を進めた結果というよりも、むしろ他者によりそのテキストが評価され、その手を経て書物として現前・流布することになったといえる。そして、その流伝において羅願の子孫と称する者の動向が大きな要素となったけれども、それだけで存続していくことは困難であったに違いない。そこで、本章では、原初期の版本が出現した宋元時代において、その主要な受け手担い手である当時の知識人層が羅願のテキストをどのように扱い、そのことが各著作の伝承にいかなる影響を及ぼしたのか明らかにしていきたい。

淳熙『新安志』は、宗室の一員（太宗六世孫）で紹興18年（1148）の進士である趙不悔（1122～？）が知徽州（任1173年3月～75年5月）として羅願が進めてきた編纂を支援し、刊行に至ったのである。彼は序文を寄せているが、これは羅願の自序とともに本志の原序となっており、四庫全書本ではそれ以外の題跋を削除している。宋代地方志の多くが地方官の賛助により費用を得て刊行にこぎつけたが、それは淳熙『新安志』においても同様であった。趙不悔についてはその他に詳しい事跡や著書の存在を知ることはできないが、羅願が自序を「之を表章せんと思欲す。蓋し忘るべからざる者有り」と締めくくる通り、本志の監修者として名を残すことになったのである。

『羅鄂州小集』は羅願の遺稿集である。その編纂者は劉清之（1134～90年）である。劉清之は江西臨江府の出身、紹興27年（1157）の進士。羅願が知鄂州の任期中に没した時、鄂州通判として同僚であった。任期中は羅願とともに、朱熹（1130～1200年）が校訂した初学者用の字書『急就篇』を刊行したり、「烈女」を祀る祠堂を整備し⁶⁸）、碑文を建立したりと文教にも熱心であった。劉清之（字子澄、静春先生）は当時の名儒朱熹、張栻、呂祖謙と交流しながら学び後進にも影響を及ぼした人物であり、『宋史』儒林伝に伝があるほか（巻437）、『宋元学案』においてその学統が立てられている（巻59清江学案）。蔵書家としての家風をもつ一族から出た⁶⁹）、劉清之には多くの著作があり⁷⁰）、朱熹撰とされる『小学』は実質的に彼の著述であった⁷¹）。ここで羅願との親交が鄂州赴任以前からのもので、かなり親密であったことは、羅願が「劉豊国行録」「劉子信墓誌銘」「書劉子和行狀後」などといった劉清之の父（滌）、従兄（肅）、兄（靖之）の行狀墓誌類を執筆していることから窺い知ることができる。こうした羅願との公私の交流によって生み出されたテキストは、『急就篇』の跋文や「烈女」の碑文「鄂州張烈女祠堂碑」も含め羅願の文集に収録されているが、劉清之はその印本を配布していたようで、朱熹は劉清之宛ての書簡で次のような感想を伝えている（『朱文公文集』巻35書）。

「羅集等、異時刻就り、各おの一二本を求む。端良此に止るは、極めて傷惜すべし」
「他時、『羅鄂州小集』と与にみな名を其の後に附すを願うも、然るにまた只だ能く題跋を作すのみ、力大文字を做り得る無し……『社記』樸拙粗疎、文字を成さず、

端良以て如何と為すか知らず。これ文字細密、経緯有り愛すべし、真に来喻の云うが如し」

「寄す所の諸書刻みな佳し。端良の亡うは、惜むべきを為すなり。然れども其の文意もまた冗に傷（やぶ）るなり、乃ち是長ずる所より困しむなり」

この羅願が短命に終わったこと『羅鄂州小集』に簡単な題辞しか寄せられなかったことを惜しみ、その文章に接すると自作「鄂州社稷壇記」が拙く感じられるとする朱熹の言は⁷²⁾、方回による『爾雅翼』跋文に引用されており⁷³⁾、さらに後に『羅鄂州小集』の重刻本の題辞などでも取り上げられ⁷⁴⁾、羅願が卓越した文章の書き手であったとのイメージを本の受け手に提示するものとして用いられていく。朱熹の羅願に対する評言は私的なものであるし無条件に礼賛するようなものではないようであるが、羅願の名前とそのテキストの価値を高める重要な意味をもつようになったのである。

『爾雅翼』は刊行の最も遅れたもので、羅氏が手写・家蔵していたテキストを方回が見出して校訂し、これを王応麟（1223～1296年）が知徽州として赴任してきた際に上梓したのである（1270年）。方回は元朝にも出仕したが、まもなく閑居して多くの著述をなした人物である⁷⁵⁾。王応麟は号深寧居士あるいは厚斎、浙西の鄞県の出身で淳祐元年（1241）の進士であるが、科学官僚としての経歴以上に重要なのは、彼が『玉海』200巻、『困学紀聞』20巻などの大著をもつ宋代を代表する史学家であることである（伝『宋史』巻438儒林）。その多くの著作のなかに『爾雅奇字音義』2巻（明抄本）が存在することからも窺えるように⁷⁶⁾、学問の手段として文字の形態・音韻・語義に強い関心を寄せており、『爾雅翼』の刊行はその内容と水準を高く評価してのことであったといえるだろう。王応麟は羅願が本書の末においていた自序を冒頭に置き、自らの題辞を後序として付し、刊行の経緯を述べている⁷⁷⁾。

こうして、羅願の主な著作は没後百年近く経過した宋末によりやく全てが刊行され、世間に流布する端緒を得たのであり、その際には凶書と学術に強い関心と素養をもつ地方官や知人の存在が大きな役割を果たしたのである。彼らは羅願と同じく父に続いて進士身分を獲得した科学官僚であり、自著もある歴とした士大夫であった⁷⁸⁾。羅願の場合も、その著作が書物というかたちになるには、かかる宋代の政治・文化を主導した士大夫によるテキストと原書の評価に大きく左右されたといえる。とはいえ、これら初版本がそのまま伝承されていったわけではなく、テキストが成立した時代を越えて存続していくためには、後代の人々による評価の継続や意義づけがなされなければならない。それでは、つづく元代において羅願はどのように扱われ、それはいかに著作の伝承と連関したのであろうか。この観点から元代において注目すべき人物として挙げられるのは、曹涇、洪焱祖、鄭玉、趙汭である。趙汭の他は羅願と同じ歙県出身で、徽州における著述家・教育家・思想家として重要な位置を占めている。

曹涇、字清甫（1234～1315年）は咸淳4年（1268）の進士で宋末元初の人である。『文

『献通考』の編者である馬端臨を若年時に指導したことがあり、宋朝滅亡後は徽州の紫陽書院山長として講学するとともに著述に励む余生を送った⁷⁹⁾。その著書は家蔵され刊行されなかったためか全く伝わっていないが⁸⁰⁾、単独のテキストとして羅願に関わるものとしては、既に参照してきた「鄂州太守存齋先生羅公伝」(1308年)がある。これは、羅願の伝記であり羅願急死の真相として『新安統志』(1235年)に依拠して別の説を示し、さらに同時代の朱熹、周必大の「畏友」であったことや後の湯漢(1244年進士)、馬廷鸞(1247年進士)が『羅鄂州小集』を所蔵したり愛読したりしていたことを述べている。馬廷鸞は馬端臨の父なので曹涇自身の見聞したことも反映されているのだろう。本来、この文章は羅氏の「家伝」のために執筆されたものであった⁸¹⁾。しかし、前章で取り上げた羅宣明による『羅鄂州小集』、そして清代に重刻された淳熙『新安志』などに附録され、作者の人物像を受け手に明示するテキストとして活かされることになる。

洪焱祖、字潛夫(1267～1329年)は父椿と同様にモンゴル政権下地方官として登用され、平江路学録、長蘆書院山長など教職も歴任している⁸²⁾。彼は羅願の著作の伝承において特別な存在である。すなわち、淳熙『新安志』と『新安統志』に続く地方志として『新安後統志』10巻を編纂しており(1319年、序文のみ残存)、これは彼の「新安後統志序」(弘治『徽州府志』巻11詞翰・序に収録)が記すように、

延祐戊午(1318年)、総管・北譙朱公郡に到るに、首めに学官に属みて二志の墨本を訪求し、校正重刊せしむ。また念うに、端平乙未(1235年)より今に到ること八十余年、久しからざるを為さず、況んや中更帰附するにおいておや、物に変遷有り、政に因革有り、今昔同日に語るべきに非ず、二志をして続かざらしめずんば、後何を將て考う所あらんや、と。

延祐3年(1316)に赴任し当地で死去した徽州路総管・朱霽(1259～1320年)の支援により刊行されたが⁸³⁾、その際に「前統二志を成すも、本みな存せず、侯今志と并せて学にて刊む」として先行する淳熙『新安志』と『新安統志』も印本を元にして徽州路の儒学にて重刻されている⁸⁴⁾。元代に流布し明初の重編『新安志』(1377年)に利用されたのはこの版本とみられる。そして、羅願の著作に顕著な変化をもたらしたのは、『爾雅翼』の版に自身の音注テキストを合刻したことである。

夫れ『爾雅』の作多く『詩』を釈するを為し、毛公の伝えし『詩』はみな『爾雅』に拠る。今此の『翼』を観るに、『詩』の義を明らかにする者は一百二十章。『三礼』の義を明らかにする者は一百四十章有奇なり。他『易』の象『春秋』の伝の如きも、間また因りて發明する有り。蓋し先生此の書を成せし時、年三十有九、經学最も精しく、ただ『爾雅』の翼を為すのみに非ざるなり。

咸淳庚午、郡守・厚齋先生浚儀王公応麟始めて之を刊布し、今五十年なり。板逸われ存せず。郡守・自齋先生北譙朱公霽、官に属みて墨本を訪求し、費を節して重刊せしむ。且つ難字頗る多きを以て、初学いまだ遽に曉るあたわず。焱祖をして詳し

く音釈を加え、各巻の末に附せしむ。また旧本筆吏の手より出ずれば、頗る訛舛有り。謹みて之を正すを為し、知らざる所の者は闕く。

ここでは先ず『爾雅』が漢・毛亨の伝授した『詩経（毛詩）』に準拠している旨述べている。これは『爾雅』が『毛詩』についての漢代の解釈を集録したものとする欧陽脩の『詩本義』以来展開してきた認識である⁸⁵⁾。その上で『爾雅翼』が『毛詩』のみならず『儀礼』『周礼』『礼記』、『易経』の象伝『春秋』の伝など経書ならびにその注解の精読に有用であるとの主張は、洪焱祖の学識と本書に対する理解の深さに裏打されているといえよう。そして王応麟の版木が失われているので、その印本を手に入れて校訂を加えたが、さらに読者の理解を容易にするために難字に音注を施すことにしたという。洪焱祖は羅願の原序だけでなく王応麟の後序にも注釈を加えており、そこで『羅鄂州小集』について言及している。こうして『爾雅翼』も淳熙『新安志』と同じく朱霽の理解を得て再刊されたのである（1320年）。洪焱祖は方回や曹涇らの伝記を執筆しており郷土の先人に対して強い関心をもっていたことが窺えるが⁸⁶⁾、そのなかでも羅願の著作に最も深く関与したのである。なお、自身の文集は家蔵にとどまったためか流伝せず、宋濂の序を付す詩集『杏亭摘稿』1巻を遺すのみとなっている（四庫全書）。

鄭玉、字子美（1298～1358年）が活動したのは元末である。『宋元学案』によれば、その学風は朱熹と陸九淵の学を融合させるものであったという（巻94師山学案）。その著『春秋経伝闕疑』45巻、『師山文集』8巻遺5巻が現存している（四庫全書）。彼は『羅鄂州小集』を再刊し自身の序文を附刻したが⁸⁷⁾、『宋元学案』を参照すると、その際に資金を供出したのは彼の門人達であったことがわかる。各地に叛乱がひろがる中、鄭玉は順帝に侍従として招かれるも出仕せず⁸⁸⁾、明軍の徽州入城に際して自決した（『元史』巻196忠義4）。こうした戦災の結果、宋濂に「近歳以来、兵火迭変す。其の縉紳の蔵する所より出ざる者もまた静春（劉清之）の哀る所の旧に非ず」と指摘されるように⁸⁹⁾、『羅鄂州小集』は散逸してしまい、読書人からテキストを集めたものの、劉清之による原書を完全に復元することはできなかったという（この洪武本は『宋史』芸文志と同じ5巻構成ではある⁹⁰⁾）。しかしそれでも、鄭玉の序文は最も古い題跋として後の版本において附刻されていく。これは編纂の経緯などを伝えるべき劉清之の原序がなく、それを代用する機能をもっていたからではないかと考えられる⁹¹⁾。

趙汭、字子常（1319～1369年）は歙県に隣接する休寧県の出身で元末明初の人であり、羅宣明による『羅鄂州小集』刊行に際しては、宣明側の依頼により校訂を行うとともに題跋を寄せている⁹²⁾。先に触れたように、このときには善本が失われており、「汭避けし地より還るに、蔵書多く散失す。『小集』を友人より求め、また郷先生・陳公櫟の伝う所の本を得、而うして其の疑謬を正す」と述べるように校訂には陳櫟所蔵のテキストが活用されたという⁹³⁾。陳櫟（1252～1334年）も休寧県の人で朱子学の宣揚に尽力し、江西の呉澄と並び称された（伝『元史』巻189儒学1）。その著作のうち『尚書集伝纂疏』

6巻、『歴代通略』4巻、『勤有堂随録』1巻、『定字集』16巻別集1巻、といった経学・史学に関するものと詩文集が現存し（四庫全書）、さらに『新安大族志』『新安名族志』など徽州における名門家系を序列化した著作もあった⁹⁴⁾。一方、趙汭（東山先生）は元の大儒呉澄と同学の黄沢に学び特に『春秋』に通曉し⁹⁵⁾、徽州において鄭玉とならび朱子学の進展に寄与したことが指摘されている⁹⁶⁾。趙汭らと『元史』編纂に携わり、『羅鄂州小集』の校訂も手がけた趙堦（江西新喻県）は呉澄の高弟で江西撫州出身在住の虞集（1348年没）の葬儀の際に知己を得、本書を贈呈されたといひ⁹⁷⁾、儒者の交流をつうじて他の地域へと本書と羅願の名が広まっていったようすが垣間見える。

以上、元代においては学識者によって羅願の著作が尊重され重刊されていくと同時に、作者である羅願の人物背景を詳述する伝記、本文の校訂と注釈テキスト、後続の地方志、そして文集の再編集と題跋の附刻などといった宋代とは異なる状況が生じたことを確認することができる。これらは伝承面で意義があると同時に原書の改変につながる側面もあったといえる。とりわけ、陳櫟による『爾雅翼』の節略本などは、後に凶書の全一性を損なうものとして批判されるものであった⁹⁸⁾。いずれにせよ、科挙制度の振るわない時代においても儒学を規範とする知識人層のあり方は変わらず、郷土を拠点としながらも広域的な影響力をもった学識層が率先し、全体的にみると羅願の主な著作全てが受容されたのである。

なお、羅願の書物が徽州の家々に所蔵されていたことは、各書の題跋における「藏書家」への言及により知ることができる⁹⁹⁾、曹涇による『羅鄂州小集』の抄本がはるか後の羅惟善本（1500年）に用いられたことは第Ⅰ章に述べたところである。しかし、そうした、ただ所有し閲覧するだけの一般の知識人が本章で確認してきたような伝承の主要な担い手ではなかったことも明らかである。また、地方官が賛同し官府で刊行されてもその版木が存続するとは限らず、伝存する版本から重刻せざるをえないことがあった。こうして、羅願の著作の流伝は高い素養と影響力をもつ特定の士大夫・学識者による著作・祖本の評価とテキストの蒐集、整理校訂、版刻、手写、当該時代人による関連テキストの附加といった自発的な営為によってはじめて実現したといえるだろう。

おわりに

題辞類を通して本稿で明らかにしてきたことを簡潔にまとめると次の通りである。羅願の著作が社会に現前する起点において、知州や同僚など地方官の理解を得たこと、当地の文人学者に尊重されたことは有利に作用した。そしてさらに、後代に書物としての全一性を保ちながら伝承されていった背景として、その子孫と称する同姓と郷土の優れた凶書と認識する徽州の読書人層が重要な役割を果たしたことが指摘される。刊行の際には序跋文が追加されたが、これは関係者の自意識と権威付けが背景にあり、本来の姿

から乖離している観がある一方、江南など他地域の名士碩学へと著作が提示され全国的な存在となる契機にもなったといえる。なお、本稿は本文の内容や構造を直接の検討対象としていないので、生成のみならず受容の問題についても内的な面では十分に論究されていない。これらについては今後、淳熙『新安志』を検討していく上での課題としたい。

ところで、明初の李宗頤は『羅鄂州小集』の序文において、羅頤と同じ頃に同じく士大夫として著書をもっていった先祖がありながら、自分にはそのテキストが伝わっていないことを引き合いに重刻の意義を称賛している。

蓋し予の五世祖清恵公（李大性）、宋の孝・光・寧三朝に歴仕し、進む所の『典故弁疑』二編『表奏』二冊及び『怡軒遺稿』五集、考亭先生（朱熹）と往復せる書翰有るも、尽く乱離に亡散し、一字も或いは存する者無し。是の集を読むに、いづくんぞ焉に感じ焉に愧じざるを得んや。

李宗頤は王禕に「南昌李氏譜序」という文を執筆してもらっている（『王忠文集』巻6収録）。先祖の著作を現物としてもつことのできない李宗頤にとって、名士であった先祖とのつながりを示す書物とは、族譜という後出しのテキストしかなかったのである。また、劉清之の著書は羅頤の2倍以上ありながら、伝朱熹撰の『小学』は別として『戒子通録』8巻しか現存しない¹⁰⁰。劉清之の家系は北宋の初期から連綿と士大夫を輩出してきたけれども¹⁰¹、その後も劉氏が徽州羅氏のように家系、およびテキストを保管し断続的に書物を刊行するような家風を存続させていくことができたかどうか定かでない。南宋時代には多くの士大夫により無数の著作がなされ、それなりに世間に名を知られていた。しかし、全国的な存在ではなかった人物の作品が歴史の風雪に耐え伝承されるには、その著作を尊び、名士碩学とのつながりをもつような子孫ないし同姓の存在も必要だったのである。

最後に、以上のことが淳熙『新安志』の受容と伝承に及ぼした影響について考察したい。地方志は地域に即した編纂物であるから、文集のように一個人の著作としては認知されにくい面があった。例えば、劉清之の出身地である江西・臨江軍には、袁震撰『臨江軍図経』7巻、李伸撰『重修臨江志』7巻が存在していた（『宋史』芸文志）。それは亡失しているが、おそらくその記事内容が断片化して後の地方志に吸収されてしまい、オリジナルの意義が消失してしまったものとみられる。このような事態は決して珍しくなかったと思われる。淳熙『新安志』に関しては明初までは統治者が尊重することもあったが、中期以降地方志が次々と出てくると、もはや公的に保全させる必然性はなくなっていった。しかし、朱熹にも称賛された南宋徽州を代表する著述家として羅頤の名は、その詩文集である『羅鄂州小集』によって後代の人々に示し続けられた。その中の自序が『爾雅翼』への関心を喚起していたことは既に示したが、明清時代に『羅鄂州小集』は『新安志』からのテキストによって増広されるようになった。このことは、『新安志』が羅頤の著作の一環をなすものとして意識されるようになったことを意味する。こうし

て、テキストの源泉としての淳熙『新安志』全体のオリジナル性が重視されるようになったと考えられる。

清の康熙年間、「好古博聞の士」（呉瞻泰・書後）であり、本志の重刻に尽力した黄以祚の遠祖は唐代の黄芮だという¹⁰²⁾。黄芮は本志第8巻に伝があるが、『新安文献志』や歙県志にも採録されており、こちらの方が流布していた。しかし黄氏には、このようなテキストが断片化した状況には満足できず、それが原書の一部を構成している『新安志』への関心を高めたのではないだろうか。彼らは王士禎の題跋を獲得することで「以て其の伝を永えに」（黄以祚・跋）しようとしていたし、彼らと交流のあった程哲は自身が増広した『羅鄂州小集』の第6巻に「新安志序」を採録している。こうして、しばしば更新される編纂物としての性格からとりわけ散逸しやすかった地方志に属する淳熙『新安志』も、羅願の名前とその著作としての全一性を重視する人々の存在によって印本として復活し、宋代を代表する地方志として広く評価される道が拓かれたのである。

註

- 1) 章学誠撰「書吳郡志後」（『文史通義』巻8外篇3）。
- 2) 錢大昕撰「跋新安志」（『潜研堂文集』巻29）。
- 3) 拙稿「宋代地方志における（テキスト）性」（『SITES 統合テキスト科学研究』Vol.1 No.2, 2003年）。
- 4) 『四庫全書総目提要』巻159によれば、その底本6巻附録2巻には「願之疏族」の『月山録』が附刻されており、無用な部分として削除したことを述べるが、版本に関しては触れていない。『北京図書館古籍善本書目』に「『羅鄂州小集』六巻 宋羅願撰 羅鄂州遺文一卷 羅頌撰 附録一卷 明刻本 五冊 九行十九字白口四周单边」と記される版本（紀年不詳）がある。これに対し、祝尚書氏は北京図書館蔵本の附録が『月山録』で第6巻の内容が『新安志』からの転載であることを示し、四庫全書の底本であったと推定している（『宋人別集叙録』中華書局、1999年、1051頁）。さらに、傅增湘の『藏園訂補邵亭知見伝本書目』により畢懋康本と同じ万曆年間の版としている（同上1050頁）。
- 5) 『羅鄂州小集』程哲序
原集五巻、前弘治中刻於裔孫文達、洚更兵燹、流布漸稀。余特取旧本校讎補綴、授諸劔胤以広其伝。
- 6) 祝允明の跋文は同撰『懷星堂集』巻24に「重刻鄂州小集後序」として収録。祝允明は蘇州長洲県出身、正徳4年（1439）の進士で書家として著名である。
- 7) 畢懋康本について『中国叢書広録』（湖北人民出版社、1999年）を検索すると、万曆45年（1617）・畢懋康編『合刻浮溪鄂州二集』の存在が知られる。この版本も6巻本かつ「九行十九字白口四周单边」であり、北京図書館蔵の明刻本と共通する。畢懋康本に『月山録』が付され第6巻の内容が四庫全書本と同一であるかどうか確認することは、四庫全書本の来歴、即ちだれが『新安志』を用いて第6巻を増広したのか知る上で鍵となるように思われる。
- 8) 北京図書館に3部（8冊、4冊、5冊）あるほか、上海、重慶図書館にも収蔵。
- 9) 静嘉堂文庫（4冊）、東京大学図書館（2冊）、内閣文庫（4冊、6冊）に収蔵されている。
- 10) 国内では静嘉堂文庫（4冊）、国会図書館（12冊合4冊）、東洋文化研究所など所蔵。
- 11) 北京図書館（6冊2部）と東京大学図書館（6冊）、安徽博物館（清・陳鱣批校）に収蔵。

- 12) 『蘇州図書館蔵古籍善本提要(経部)』(鳳凰出版社、2004年)143頁によると、この版本の扉書きに「呈坎文献祠藏版 照宋本考訂無訛」とあり、巻頭に李化龍(1554~1611年)の序、羅願の自序、洪焱祖の音釈、方回の識、洪焱祖の跋が配され、巻末には崇禎6年(1633)づけ羅焱の跋文が付されているという。洪焱祖の跋の末部には「天啓丙寅(1626年)從裔孫羅朗重訂」との刻字があり、羅焱が羅朗の版を用いたことが推定される。なお「呈坎」は歙県北西部の通徳郷を構成する地域であり、羅願は当地の出身とされている。康熙『歙県志』巻1輿地・郷都、同巻7選舉・進士、参照。
- 13) 都穆は金石に関する明代において最も完備した著述を行っているという。内藤湖南著『支那史学史』(平凡社、1992年)第2巻44頁、参照。胡文煥については『四庫全書総目提要』巻114・116・134・138、参照。
- 14) 『爾雅翼』点校本(安徽古籍叢書・黄山書社、1991年)に附録。この本は『叢書集成初編』所収本をもとに五雅本と『学津討原』を参照したものである。
- 15) 康熙『歙県志』巻9人物・文苑、道光『歙県志』巻8人物・文苑。
- 16) 民国期の傅增湘は、正徳14年羅文殊刊本について「此書宋元均有刊本、都元敏(都穆)藏宋刊本、後歸李工部彦夫。是本為羅氏後裔所刻、蓋即從李彦夫宋本翻雕者、然則明代此書刻本莫先於此矣」(『藏園群書經眼録』巻2経部2)と記す。本版が宋本に由来する明最古の版であることを示唆する一方、洪焱祖の音釈テキストの有無については触れていない。
- 17) 『京都大学人文科学研究所漢籍目録』(1981年)1260頁、参照。
- 18) 『清史列伝』巻9に伝あり。旧名土禛。号は阮亭、魚洋山人。
- 19) 王士禛(禛)撰『居易録』巻29。
新安門人汪洪度・于鼎奇『羅鄂州小集』及鄂州所著『新安志』『爾雅翼』又程嘉燧『孟陽手書』、松寥・呉装『雪浪』等集三種(?)、万曆中刻於長治基工。
- 20) 王士禛(禛)輯、康熙43年・汪洪度等刊本『新安二布衣詩』8巻があり(『京都大学人文科学研究所漢籍目録』600頁)、汪洪度は王士禛の手の入った地元の著作を刊行していた。
- 21) 王澄編著『揚州刻書考』(広陵書社、2003年)103頁、参照。
- 22) 註3)前掲拙稿、第4章。
- 23) 弘治『徽州府志』汪舜民序(1502年)
有大中祥符之新図経、又百五十余年、有淳熙乙未羅鄂州願之志、又六十年、有端平乙未李教授以申之統志、又八十余年、有元延祐己未洪泉尹焱祖之後統志、及国朝洪武丁巳則幾六十年矣。
自新図経以上不復可見。於是、朱礼侍同乃概括三志、合而統之、以為一書。
- 24) 『永楽大典』(中華書局、1986年)巻2263「婺源西湖」巻19781「織染局」巻20205「畢祈鳳」など。
- 25) 黄以祚の跋文には「同里後学黄以祚・素亭、氏書於潭浜承德堂之家塾」と著されている。黄以祚については、乾隆『歙県志』巻13、人物志3義行に記述がある。
- 26) 呉苑は康熙21年(1682)の進士で康熙『歙県志』の編纂にも携わり、自著の『大好山水録』では『新安志』から多く引用したという(呉瞻泰『新安志書後』)。呉瞻泰にも著作がある。乾隆『歙県志』巻12人物・文苑、参照。
- 27) 劉尚恒著『徽州刻書与蔵書』(広陵書社、2003年)95頁参照。ここでは、程哲・七略書堂が『新安志』も刊行したと記すが典拠は示されていないし、他に確認できていないが、程哲と黄以祚らに交流があったことは確実である。
- 28) 陸心源撰『皕宋楼蔵書志』巻29、『新安志』十巻(旧鈔本、丁小疋旧蔵)
方氏手跋曰「本朝黄氏曾刻此書、板近藏傅溪程氏、而秘不示人。小疋主人乃一旦得鈔本凡三、而以一惠我。蓋羅氏後裔所録者此本。字較工楷、皆可貴也。丙午(1786年?)六月下澣、方輔書」。
- 29) 中華書局・宋元方志叢刊の影印本では原序以外の題跋類は一切みえないが、台湾の中央研究院歴史言語研究所の所蔵本は「清・嘉慶間綿安丁杰等刊本 清・鄭徳修手校並跋」(『中華民国台湾地区

- 公藏方志目錄』、1979年)という。浙江省湖州帰安県の丁杰は『清史列伝』巻68儒林伝にみえる。方輔は蒋元卿著『皖人書録』(黄山書社、1989年)120頁、参照。
- 30) 註28)参照。
- 31) 註28)参照。
- 32) 『宋史』巻380に「知鄂州、有治績、以父故不敢入岳飛廟。一日、自念吾政善、姑往祠之、甫拜、遽卒于像前。人疑飛之憾不積云」とある。
- 33) 恩蔭と鎖疔試については、梅原郁著『宋代官僚制度研究』(同朋舎出版、1985年)第5章第3節参照。
- 34) 羅頊撰「羅鄂州墓誌」(『新安文獻志』巻84)を参照。
- 35) 汪某撰「左朝奉郎將作監汪公(若容)墓誌銘」(『新安文獻志』巻94下)、参照。胡舜陟は『宋史』巻378に伝がある。
- 36) 弘治『徽州府志』巻7人物・文苑、参照。
- 37) 曹涇撰「鄂州太守存齋先生羅公伝」
弟頊朝散大夫・通判蘄州、贈中散大夫。子男四人縉臣・孝臣・欽臣皆早卒。睦臣承直郎・南康軍録事參軍。女三人、其一適吳文肅之子垌、文肅竹洲先生也。孫一人樸、已上擢文學公所具外、從人旁搜、足之來示。
- 38) 『吳文肅文集』20巻附録2巻(万曆甲辰刊本)、静嘉堂・尊經閣文庫所蔵。
- 39) 陸心源撰『皕宋樓蔵書志』巻84に収録。
- 40) 洪适撰「羅尚書墓誌銘」(『盤洲文集』巻77)
『東山叢書』二十巻、『奏議』八巻、『外制』二巻、蔵于家。
- 41) 程敏政編『新安文獻志』先賢事略上
羅府教、似臣、尚書汝楨孫。紹熙四年進士。樓參政鑰美其文有家法。張尚書伯垌入詞掖薦自代。以安慶教授致仕。
- 42) 曹涇撰「鄂州太守存齋先生羅公伝」
故鄂州太守存齋先生羅公卒之百三十五年至大戊申歲、其曾孫婿黃仲宣山長以公會姪孫前容州文學洪所具生年官歷卒葬之略來視、使潤飾成篇、待附家伝。
- 43) 龔廷明編著『宋代官制辭典』(中華書局、1997年)549頁を参照。
- 44) 方回撰「跋羅鄂州爾雅翼」(宛委別蔵本『桐江集』巻4)
宋興二百一十五年淳熙甲午、新安存齋羅字端良、次『爾雅翼』成、又九十六年咸淳庚午、浚儀王侯應麟為守、始刊布之。回聞之、先生、君子南渡後、文章有先秦西漢風、惟羅鄂州一人。……『爾雅翼』者、序見『小集』、世未見其書。回訪求得公之從孫(『爾雅翼』では故從孫)裳手抄副本三十二巻、侯躬自校讐、雖度聞隱説、具能知所自來、可謂後世子嚮矣。
- 45) 陸心源撰『皕宋樓蔵書志』巻12小学類1
先鄂州所作『爾雅翼』、正名弁物貫穿、百家惜其未之見也。今始得之、乃出於筆吏之手、不無豕亥之訛、裳以學淺見狹不敢輒加是正、因録而蔵之。觀者以意逆之可也。時淳祐□□□□之歲、則涂之月中澣日、曾姪孫裳記。
- 46) 王應麟撰「爾雅翼後序」
『小集』僅伝、知此者希。歲甲午書成、迨庚午九十七載、出若有期、自今顯行、式永厥垂。繇是、進大學之道、學者葆之。先是、公之從曾孫裳録蔵家楹、訪求得其書則前大學博士方君回也。識卷後而刊于郡者浚儀王應麟也。
- 47) 紫陽書院は各地にあるが、徽州では理宗の治世に州城の近郊に創建され、以来明清時代まで断続的に改修され当地における朱子学の活動拠点として著名であった。
- 48) 宋濂撰「徽州羅府君墓誌銘」(『宋學士文集』巻44、芝園前集巻4)
府君諱旦字希明姓羅氏。其先出於祝融之裔、受封于羅、子孫遂以羅為氏。始於房陵、繼遷豫章

長沙間、歙之有羅、則又自豫章而分。其居西鄉、在宋為著姓。有諱汝楫者。政和二年進士、官至龍凶閣學士・知嚴州以終。生六子曰顯、曰籟、曰頡、曰頌、曰頤、曰頊、皆曄然有文。願字端良尤号雄深雅健為當時所稱。有『爾雅翼』『新安志』『鄂州小集』等書、伝于世。

49) 宋濂撰「徽州羅府君墓誌銘」

府君蓋龍凶之裔孫。累伝至諱綺者、官承節郎、娶某氏有子四人、而府君最幼、季兄迪祿乃馬氏所出、娶汪氏年十九而亡無子。馬氏傷之、請於承節君、命府君為之後、遂禰其兄而祖其父。府君事馬氏如大母、奉汪氏若生己者。歲時坐二母堂上、帥婦子奉觴為壽、邕邕如也。其処同氣間尤尽礼、訥然似不能言。諸兄有酒而或使氣凌轢之、府君咲曰、兄真大醉耶。兄慙而去。

50) ただし、この承継方法では“昭穆不相当”となる。そのため、法的には族内でとくに異存がない場合に容認されるとはいえ本来積極的に推賞されるものではない。この墓誌銘では、自己との直接の血のつながりよりも同族の結びつきを優先する姿勢が評価されているのだろうか。実子無き場合の承継のあり方については、滋賀秀三著『中国家族法の原理』（創文社、第2刷、1976年）第3章第1節、317頁参照。

51) 弘治『徽州府志』巻10橋梁によると、同名の橋は歙県二十四都にある。

52) 『元史』巻42・43、順帝本紀

（至正12年3月）甲子、徐寿輝偽將項普略陷饒州路、遂陷徽州・信州。……（秋七月）庚辰、饒・徽賊犯昱嶺関、陷杭州路。（同13年5月辛未）、元帥韓邦彦・哈迷取道由徽州・浮梁、回復饒州、蕲・黄等賊聞風皆奔潰。

53) 宋濂撰「徽州羅府君墓誌銘」

至正辛卯（11年：1351）蕲盜起、蔓延至歙。府君謂諸子曰、国家養育汝曹久矣、今大盜攻城邑、正赤心報上時也、汝曹毋以老身為念、当思為破盜計。於是、諸子募健兒数百人、整其隊五。部領詣轅門請自効。既而盜日熾、家竟以此蕩毀。

54) 宋濂撰「徽州羅府君墓誌銘」

至正丙申（16年：1356）春、府君避兵山谷、盜兵卒至、執府君、褫其所服衣。府君罵曰、天子何負於汝而反邪、行將作疽醢矣。罵不絶口、盜怒以戈春之、府君墮澗中。時諸子在軍無知者。惟一女奴侍側、扶至家而卒。正月二十六日也。享寿六十三。

55) 元末の反乱集団が最初に敵意を噴出させたのは、南方では異民族統治そのものよりも地主・官僚による在地支配体制であり、各地で激しい攻撃にさらされた地主層は武装して元朝国家と協調し自衛・鎮圧に努めることになった。相田洋『「元末の反乱」とその背景』（初出1970年、『中国中世の民衆文化』中国書店、1994年所収）では、そうした地主の類型として羅旦（本稿注53の部分）など、宋濂の文集収録の墓誌銘からいくつかの実例が挙げられている。

56) 万曆『歙志』伝巻4人物・勲烈など以降の県志に伝あり。

57) 『羅鄂州小集』李宗頤序

宗頤伏誦鄂州羅先生『小集』而有感焉。兵興十五年、於茲故家文献蕩盡、子若孫泯絶繼紹者往往而是。子若孫雖存、然愚懦或暴横、慄不知先世文物可貴尚者又往往而是。有賢子孫而文献又足徵者若鄂州未之多見也。予邑丞伝道暇日以家譜示予、則自始祖至伝道十有七世矣。鄂州先生則其七世祖也。

58) 「羅鄂州小集題辭」として天順五年（1461）刊『宋學士先生文集輯補』にも収録。

59) 「跋羅鄂州小集題辭後」として同上にも収録。

60) 「羅鄂州小集序」として『師山集』巻3にも収録。

61) 「書（題）羅鄂州小集目錄後」として『東山存稿』巻5、『新安文獻志』巻25にも収録。

62) 趙汭撰『東山存稿』巻5にも収録。

63) 「羅鄂州小集後序」として『王忠文集』巻7にも収録。

64) 宋濂撰「題宋高宗賜答羅尚書手詔」（『宋學士文集』巻44、芝園前集巻4）

右思陵（宋高宗）所答新安羅公彥濟（汝楫）手詔一通。其諸孫宣明裝潢成卷、不遠數百里、特至浦陽江上、請灑識之。

- 65) 多賀秋五郎「新安名族志について」（『中央大学文学部紀要』史学科6、1956年）。
- 66) 『上海図書館館藏家譜提要』（上海古籍出版社、2000年）では羅汝身纂修・祝允明序『羅氏宗譜』10卷（1507年刻本）が見出される。祝允明については註6）参照。
- 67) 王禕も「送羅伝道序」（『王忠文集』巻5）で「蓋伝道之先、仕宋累世為名卿、而鄂州之名尤著」といっている。
- 68) 『宋史』巻437
州有民妻張以節死。嘉祐中、詔封旌徳県君、表其墓曰烈女、中更兵火、至是無知其墓者、清之与郡守羅願訪而祠之。
- 69) 羅願撰「劉豊国行録」（『羅鄂州小集』巻4行録）、朱熹撰「跋白鹿洞所蔵『漢書』」（『朱文公文集』巻81跋）を参照。
- 70) 『宋史』巻437の伝によると、『曾子内外雑篇』『訓蒙新書』『訓蒙外書』『戒子通録』『墨莊総録』『祭儀』『時令書』『統説苑』文集『農書』。『宋史』巻208の芸文志には、その文集として『劉清之文集』23巻が著録されている。
- 71) 宇野精一著『小学』（明治書院・新釈漢文体系、1965年）解題、参照。
- 72) 「社記」つまり「鄂州社稷壇記」（『朱文公文集』巻79記）は淳熙10年（1183）春に鄂州の統治官である羅願と劉清之の依頼により執筆したものである。
- 73) 「晦翁謂『文有経緯』、嘗欲附名集後、又謂『羅端良止此可惜』」とある。
- 74) 元・鄭玉の序文に「但朱文公常欲附名集後、卒不及有所論作」とある。康熙・七略書堂本「諸家評論」、康熙本『新安志』の黄以祚跋文でも取り上げられている。
- 75) 弘治『徽州府志』巻7人物・文苑に伝あり。
- 76) 『現存宋人著述総録』（巴蜀書社、1995年）23頁、参照。
- 77) 註46)参照。
- 78) 洪焱祖撰「方総管回伝」（『新安文獻志』巻95上、収録）
璧流集・桐江集、若干巻行於世、又有説易釈疑・易中正考・皇極経世考・古今考・歴象攷・玉攷・先覚年譜・瀛奎律髓・名僧詩話、合若干巻蔵於家。
- 79) 洪焱祖撰「曹主簿涇伝」（『新安文獻志』巻95上、収録）。
- 80) 同上「曹主簿涇伝」と弘治『徽州府志』巻7の伝によると、『講義』『書韻儷彙』『文韻儷彙』『服膺録』『読書記』『雑作管見』『三場管見』『泣血録』『過庭録』『課余雑記』『曹氏家録』『古文選』など。
- 81) 註42)参照。程敏政編『新安文獻志』巻95上にも収録されている。
- 82) 弘治『徽州府志』巻7人物・文苑に伝あり。
- 83) その伝記史料である、蘇天爵撰「元故通議大夫徽州路総管兼管内勸農事朱公神道碑」（『滋溪文稿』巻17）では、賦役を合理化公平化するなどして統治を安定させた上で「又葺学宮以教士子、修郡乘以識風土。郡人方楽其政、而公薨矣」とあるごとく、学校を整備し地方志（郡乗）を編纂させて文教を振興した業績が顕彰されている。
- 84) 胡炳文撰「跋新安後統志」（『雲峯集』巻4、収録）。
- 85) 羅願自序に「不若『爾雅』、博洽雅馴、起於漢世、学者自為韻門、欲輔成詩道」とある。洪焱祖は「釈訓以下、或言仲尼所増、子夏所足、其説皆不足信、故羅公斷定」と注記し、『爾雅』が周公と春秋時代の孔門により成立したとの説に否定的であったことがわかる。内藤湖南は「爾雅の新研究」（1921年）において、前三篇は古い伝承を濃厚に含むものの、全体の成立および『爾雅翼』が扱う部分の形成は戦国末から漢代初としている（『内藤湖南全集』第7巻、筑摩書房、1970年、収録）。
- 86) 註78)、79)参照。
- 87) 『羅鄂州小集』鄭玉序

歲月既久、小集亦不復存。予嘗得之於藏書之家、誦而愛之、乃謀刻之梓、以廣伝布。從予游者洪氏之兄弟曰斌、曰杰、曰宅、鮑氏之叔姪曰元康、曰深、樂以其資共成之、而請予為之序。予聞諸先生長者、南渡後、文章有先秦西漢之風、新安二羅。

88) 『元史』卷44順帝本紀7

(至正15年6月)庚辰、徵徽州隱士鄭玉為翰林待制、不至。

89) 註59)参照。

90) 『羅鄂州小集』趙汭序〔註61)〕

不幸一再伝而中絶、遂俱亡矣。惟『新安志』『爾雅翼』二書、吾郡嘗刻諸梓。此『小集』者郡人亦嘗再刻之。故家有其書。兵火後、板本既弗存。三書皆不易得矣。

91) 『羅鄂州小集』鄭玉序

鄂州之文尤縝密古雅。惜其全集不伝。今行於世者鄂州通守劉清之子澄之所刻。蓋鄂州既終於郡、子澄因以所見哀集成書、号『鄂州小集』。視其大全蓋什一耳。

92) 註62)趙汭跋

羅君伝道、鄂州使君七世諸孫也。將赴官洪之靖安、使其表弟汪弁奉写本『鄂州小集』來、校其闕誤、將刻諸官舍。汭以所藏本証之、去其統編之弗類者、而補其闕逸以還劉公之旧。

93) 註61)趙汭序。

94) 註65)多賀氏前掲論文参照。

95) 『明史』卷282儒林、『宋元学案』卷92草廬学案。著書は『春秋集伝』『春秋属辞』『左氏補註』『師説』及び『東山存稿』。『元史』の黄沢伝には「門人惟新安趙汭為高弟、得其『春秋』之学為多」(卷189儒学1)とある。

96) 董玉整主編『中国理学大辞典』(暨南大学出版社、1996年)612頁「新安学派」。

97) 『羅鄂州小集』趙壘序。ここでは、趙汭が宣明と「姻友」であるとも述べているので、羅氏と姻戚関係があったことがわかる。

98) 『四庫全書総目提要』卷41

而櫟乃執統出新説、繩願所引据之古義、尤属拘墟。今願書流伝不朽、而櫟之節本片字無存、則其曲書肆詆謀、無人肯信而伝之、略可見矣。

99) 『爾雅翼』の場合は、都穆序に「書嘗一刻於宋、再刻於元。以屢經兵燹、人間罕存。雖公之後人与郷之士夫間有藏者、率皆繕写、且多訛欠。予家旧蔵、乃未刻本、後歸李工部彦夫、蓋彦夫新安人也。今羅公十六世孫文殊持是書來謁、詢之、知其捐資新刻、即予向遺李君者也」とある。

100) 註70)および『現存宋人著述総録』101頁、参照。

101) 朱熹撰「劉子和伝」(『朱文公文集』卷98行状)

国朝鉅人門戸一再世凋落者何可悉数。惟劉氏自太宗時歷嘉祐・元祐盛際、莫不有人。逮子和兄弟、世教益遠而家法益峻、忠厚雍睦之風不墜。求之故家、能如是者少矣。

102) 淳熙『新安志』黄以祚跋(1707年)

汪君訪得原本、持以示余。其間義民伝首載先遷祖孝子芮、因謀付劄。

〔追記〕最近、趙華富氏の『徽州宗族研究』(安徽大学出版社、2004年)が出版された。その第9章は文献・実地両面の調査に基づいた事例研究で、徽州歙県の羅姓で最も発達し今なお結合を保っている宗族として呈坎前羅氏、後羅氏が取り上げられている。氏によると、この二つの宗族は豫章(江西南昌)から移住してきた羅天真、天秩(従兄弟)を各自の始遷祖として分派したものである。そして後羅氏の『歙北呈坎文献羅氏族譜』(抄本)では羅願は天秩の9世孫とされており、宣明の祖父綺の官職として「国士監祭酒」、弘治12年(1499)に知府彭沢らにより汝楫、願、似臣ら3代以下34名を記念し

た「文献坊」が建立されたことなどを伝えているという。本書で特に注目されるのは、前後羅氏の族譜には羅願と朱熹による「歙西羅氏宗譜序」「呈坎羅氏宗譜序」が収録されているとの記述である。羅願は族譜も編纂していたことになるけれども、二人の現行文集には見当たらず、なぜ、「家譜」をもっていた宣明はそれらの文章を『羅鄂州小集』の刊行にあたり掲載しなかったのか、謎が生じる。多くの場合、族譜本体は抄本として伝えられ部外秘とされることも珍しくなく、さらに歴史的事実には厳密であるとは限らない。その点、世間に対する公表・流布を強く意識している一般漢籍とはテキストとしての性格が大きく異なっている。本稿では外向性の高い書物である地方志の展開を考察するための一手段として羅氏を検討している。